

鹿児島県総合教育センター

平成 27 年度長期研修研究報告書

研 究 主 題

児童の ICT 活用による情報活用の実践力の育成

－自ら考え、発信できる力を育む学習指導の工夫を通して－

鹿児島市立本名小学校
教 諭 白尾 麻衣

目 次

I	研究主題設定の理由	1
II	研究の構想	
1	研究のねらい	1
2	研究の仮説	2
3	研究の計画	2
III	研究の実際	
1	情報教育の基本的な考え方	2
(1)	情報教育の目標	2
(2)	「情報活用の実践力」の育成に関する基本的な考え方	3
2	研究主題等に関する基本的な考え方	4
(1)	「児童の ICT 活用」とは	4
(2)	「自ら考え、発信できる力」とは	4
(3)	「学習指導の工夫」とは	4
3	実態調査	5
(1)	実態調査の方法	5
(2)	結果	5
(3)	分析・考察	7
4	情報活用の実践力の育成のための授業づくり	8
(1)	視点① 情報活用の実践力の育成を目指す学習過程	8
(2)	視点② 児童による ICT 活用の場面の工夫	8
(3)	視点③ 自ら考え、発信できる力を育む学習指導の工夫	9
5	検証授業の実際と考察	9
(1)	【検証授業Ⅰ】第6学年社会科	10
(2)	【検証授業Ⅰ】第5学年家庭科	13
(3)	【検証授業Ⅰ】分析・考察	16
(4)	【検証授業Ⅱ】第5学年社会科	17
(5)	【検証授業Ⅱ】分析・考察	22
IV	研究のまとめ	
1	検証授業前・検証授業後の実態調査から	24
2	成果と課題	25
(1)	成果	25
(2)	課題	25
(3)	おわりに	25
※	引用文献・参考文献	

I 研究主題設定の理由

社会の情報化の進展に伴い、子供たちには、社会の様々な変化に主体的に対応できるような能力が求められている。特に、教育の情報化の対応の中で、小学校・中学校・高等学校においては、学習指導要領の下、児童生徒の発達の段階に応じて、情報活用能力の育成を図ることが求められている。このような背景を受け、ICT環境の整備が進められており、教員は、それらのICTを有効に活用して、未来を担う子供たちに、生きる力に資する情報活用能力を育むことが不可欠となっている。

「学校における教育の情報化の実態等に関する調査結果」（文部科学省）によると、教員が「児童生徒のICT活用を指導する能力」は、「授業中にICTを活用して指導する能力」に比べ、低い傾向にある。また、文部科学省が児童生徒を対象に初めて実施した情報活用能力調査（平成25年10月～平成26年1月、調査対象小5・中2）の結果・分析等によると、小学生は、整理された情報を読み取ることはできるが、複数のWebページから目的に応じて、特定の情報を見付け出して関連付けることや、情報を整理して解釈すること、また、受け手の状況に応じて情報発信することなどに課題が見られる。これらの調査結果等から、学校教育における児童生徒の情報活用能力の中でも、特に、情報活用の実践力を育成するための指導の在り方について、見直しや改善の必要があると考える。

本校児童の学習態度は比較的落ち着いているが、「誰かが解決してくれる。」「誰かが答えを教えてください。」など、問題解決に対して消極的な姿勢や必要以上に他者を頼り過ぎる場面がしばしば見られる。ICTを活用した学習活動では、前述の傾向がある児童も含め、コンピュータやタブレット端末に高い興味や関心を持ち、楽しく操作する姿が見られる。しかし、発達の段階に応じた操作のスキルが身に付いていないため、文字入力の仕方など、授業中に計画外の指導に時間を要することがあったり、情報の収集のみに終始し、情報を活用した表現や発信がなされないまま単元の終末を迎えたりすることがあった。また、学習のまとめの場面において、児童は紙媒体による発表の経験は重ねているが、ICTを活用した経験は少ない。これらの現状は、児童の発達の段階に応じて、情報活用の実践力を、どのように育成していくかという視点に基づいた指導計画の作成や、児童によるICT活用の指導が十分になされていなかったためであると考えられる。なお、本校のICT環境は、比較的充実しており、コンピュータ、大型テレビ、実物投影機、電子黒板、タブレット端末等が整備されている。よって、教員は、これらの環境を生かし、児童に活用させる機会を多く設定することも必要である。

そこで、本研究では、情報活用の基礎となるICTの基本的な操作を身に付けさせ、課題や目的に応じた情報の適切な活用を行ったり、受け手の状況などを踏まえ、自分の考えを創造・発信したりするような情報活用の実践力の育成に関わる一連の学習活動の検討を中心に行う。情報活用の実践力の中でも、特に判断、表現、発信などの力の育成をねらいとし、児童がICTを活用しながら、自ら考えたり、発信したりするような学習指導の在り方を工夫する。そうすることで、本校におけるこれまでの情報活用の実践力を育成する取組や指導について改善が図られるのではないかと考え、本主題を設定した。

II 研究の構想

1 研究のねらい

- (1) 先行研究等から、情報活用の実践力に関わる課題について明らかにする。
- (2) 実態調査等から、情報活用の実践力の育成における指導上の課題を明らかにする。
- (3) 情報活用の実践力の育成に関わる学習指導について検討する。
- (4) 検証授業等の分析を行い、本研究の成果と課題を明らかにする。

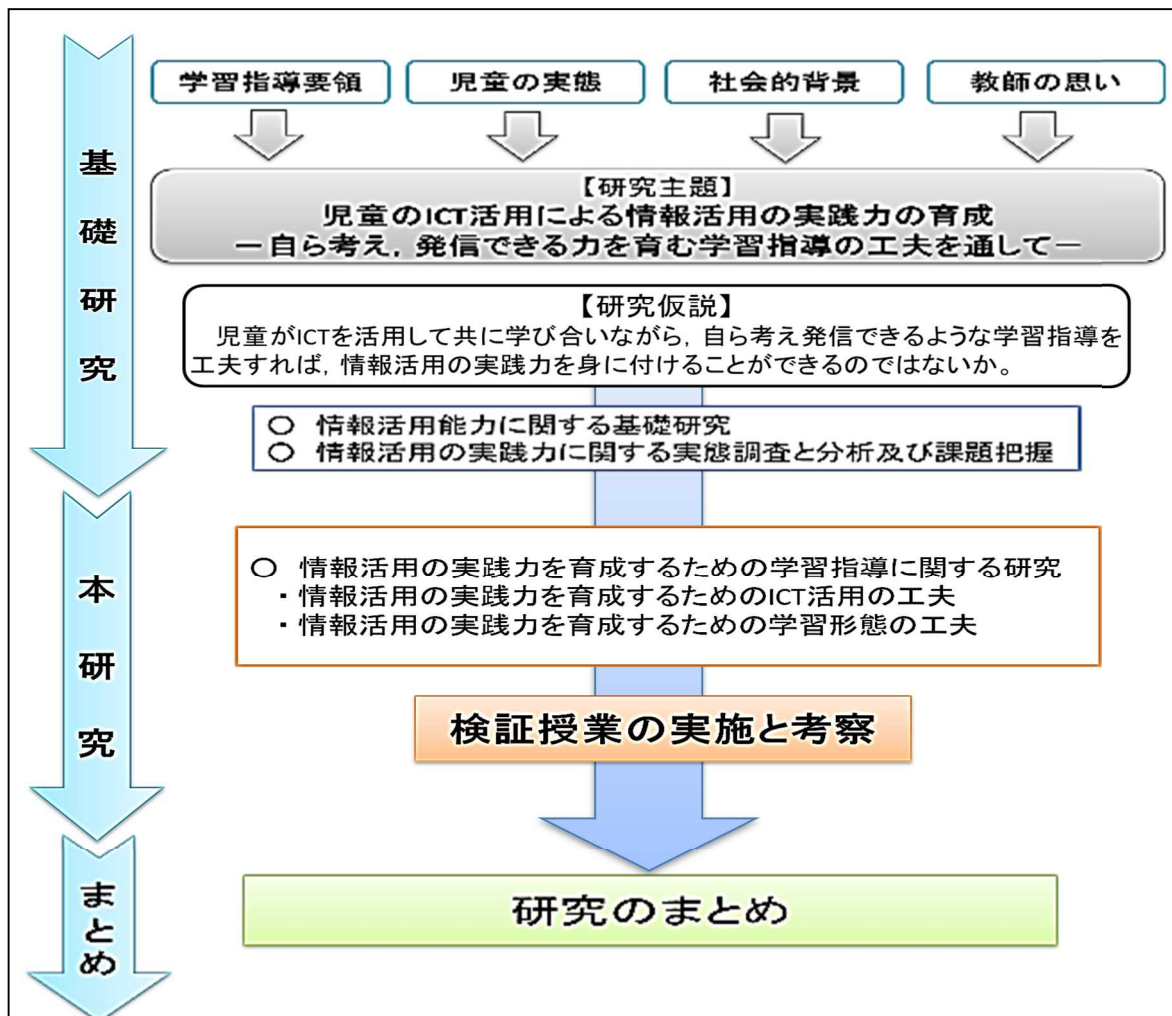
目 次

I	研究主題設定の理由	1
II	研究の構想	
1	研究のねらい	1
2	研究の仮説	2
3	研究の計画	2
III	研究の実際	
1	情報教育の基本的な考え方	2
(1)	情報教育の目標	2
(2)	「情報活用の実践力」の育成に関する基本的な考え方	3
2	研究主題等に関する基本的な考え方	4
(1)	「児童の ICT 活用」とは	4
(2)	「自ら考え、発信できる力」とは	4
(3)	「学習指導の工夫」とは	4
3	実態調査	5
(1)	実態調査の方法	5
(2)	結果	5
(3)	分析・考察	7
4	情報活用の実践力の育成のための授業づくり	8
(1)	視点① 情報活用の実践力の育成を目指す学習過程	8
(2)	視点② 児童による ICT 活用の場面の工夫	8
(3)	視点③ 自ら考え、発信できる力を育む学習指導の工夫	9
5	検証授業の実際と考察	9
(1)	【検証授業Ⅰ】第6学年社会科	10
(2)	【検証授業Ⅰ】第5学年家庭科	13
(3)	【検証授業Ⅰ】分析・考察	16
(4)	【検証授業Ⅱ】第5学年社会科	17
(5)	【検証授業Ⅱ】分析・考察	22
IV	研究のまとめ	
1	検証授業前・検証授業後の実態調査から	24
2	成果と課題	25
(1)	成果	25
(2)	課題	25
(3)	おわりに	25
※	引用文献・参考文献	

2 研究の仮説

児童が ICT を活用して共に学び合いながら、自ら考え発信できるような学習指導を工夫すれば、情報活用の実践力を身に付けることができるのではないかな。

3 研究の計画



Ⅲ 研究の実際

1 情報教育の基本的な考え方

(1) 情報教育の目標

情報教育とは、児童生徒の情報活用能力の育成を図るものである。平成9年10月の「情報化の進展に対応した初等中等教育における情報教育の推進等に関する調査研究協力者会議」第一次報告において、情報教育の目標は、図1のように「情報活用の実践力」、「情報の科学的な理解」、「情報社会に参画する態度」の三つの観点に整理されており、それぞれが独立した

たものではなく、これらを相互に関連付けて、バランスよく身に付けさせることが重要となっている。また、「教育の情報化に関する手引」（平成22年10月、文部科学省）には、「こうした情

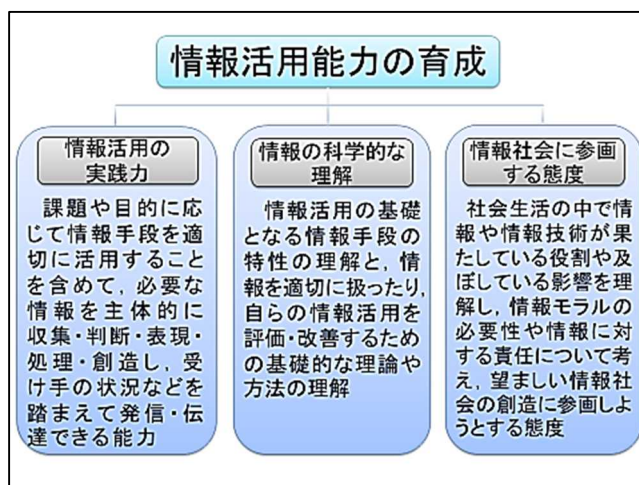


図1 情報教育の目標

報教育の目標は、情報活用能力の育成を通じて、子供たちが生涯を通して、社会の様々な変化に主体的に対応できるようにするための基礎・基本の習得を目指しており、このことは『生きる力』の重要な要素である。」と示されている。

(2) 「情報活用の実践力」の育成に関する基本的な考え方

情報活用能力の育成については、情報教育の目標の三つの観点をバランスよく身に付けさせることと併せて、児童生徒の発達の段階に応じて小学校・中学校・高等学校の各学校で指導すること、また、各学年、各校種間におけるつながりをもたせ、系統的に指導することが重要である。

小学校段階では、中学校技術・家庭科や高等学校情報科のように情報活用能力の育成を専門に担う教科・科目の設定がないため、情報教育は、各教科等の指導を通じて行うこととなっている。また、学級担任がほとんどの授業を一人で担当することから、全教育活動を通した情報活用能力の育成と関連を図った取組が行いやすい。そして、情報活用能力の育成の中でも「情報活用の実践力」に重点を置いた指導が中心になることが多い。

中学校段階においては、小学校段階で身に付けた知識や技能を基に、情報教育の目標の三つの観点を包括的に扱うとともに、技術・家庭科を中心に、「情報の科学的な理解」の充実を図る。

さらに、高等学校段階では、小学校・中学校段階の基礎の上に、各教科等の指導を通して、コンピュータや情報通信ネットワークなどを実践的に活用するとともに、今までに習得したスキルを総合力（リテラシー）として熟成させることが必要である。併せて、情報モラル教育については、小学校・中学校・高等学校を通じて発達の段階を考慮した指導をしていかななくてはならない。

図2は、情報活用の実践力の観点を「課題や目的に応じた情報手段の適切な活用」、「必要な情報の主体的な収集・判断・表現・処理・創造」、「受け手の状況などを踏まえた発信・伝達」の三つの要素に整理したものである。

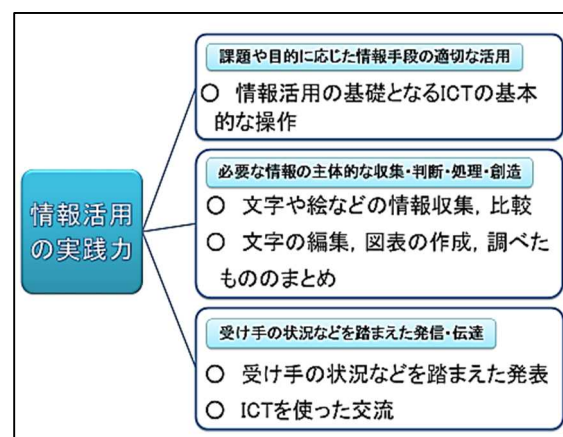


図2 情報活用の実践力の3要素

ア 「課題や目的に応じた情報手段の適切な活用」について

情報活用の基礎となる ICT の基本的な操作を身に付けさせるため、図3のような基本的な操作を、一連の操作として身に付けさせるようにする。なお、文字の入力については、ローマ字による正しい指使いでの文字入力（タッチタイピング）を身に付けさせることが望ましい。

教員は、各教科等の学習活動の中で活動内容とICTとの関連を検討し、児童に意図的・計画的にICTを活用させ、基本的な操作を確実に身に付けられるように段階的な指導に努めていくことが必要である。

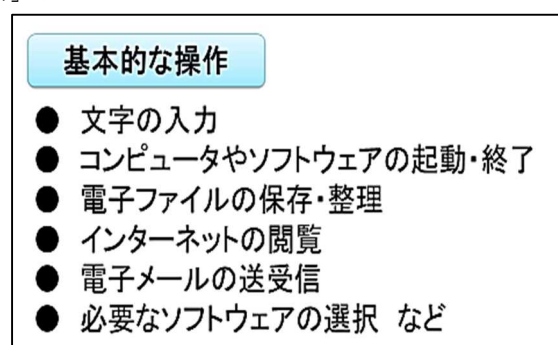


図3 ICTの基本的な操作

イ 「必要な情報の主体的な収集・判断・表現・処理・創造」について

小学校段階では、図4のような指導を通して、学習に必要な情報の収集・判断・表現・処理・創造に関し、様々な方法で、文字や画像などの情報を収集して調べたり比較したり、文

章を編集したり、図形や表、グラフ、イラストなどを作成したり、調べたものをまとめ、発表したりする能力を各教科の指導の中で、児童に身に付けさせることが必要である。

ウ 「受け手の状況などを踏まえた発信・伝達」

情報の発信・伝達に関し、受け手の状況などを踏まえて、学習したことや調べたこと、自分の伝えたいことを発表したり、電子メールやWebサイトなどICTを使って交流したりする能力を身に付けさせることが必要である。

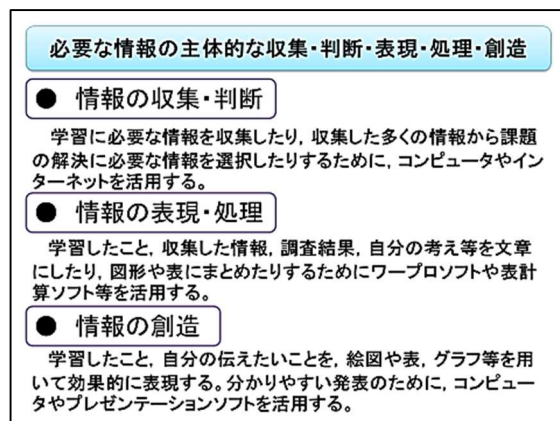


図4 必要な情報の主体的な収集・判断・表現・処理・創造に関する指導内容

2 研究主題等に関する基本的な考え方

(1) 「児童のICT活用」とは

ICTは効果的に活用することにより、より分かりやすい授業の実践、一人一人の能力や特性に応じた学びの方法や、子供が共に教え合い、学び合う協働的な学びに役立つものである。したがって、教員は、教員自身のICT活用を推進するとともに、児童によるICT活用にも、より積極的である必要がある。「児童のICT活用」とは、各教科等の内容を深く理解し、単元の目標を達成するために、図5で示すように、児童が情報を収集・選択したり、文章や図・表にまとめ、発表したりする際、あるいは、繰り返し学習によって知識の定着や技能の習熟を図る際の手段として、児童自身がICTを活用することである。

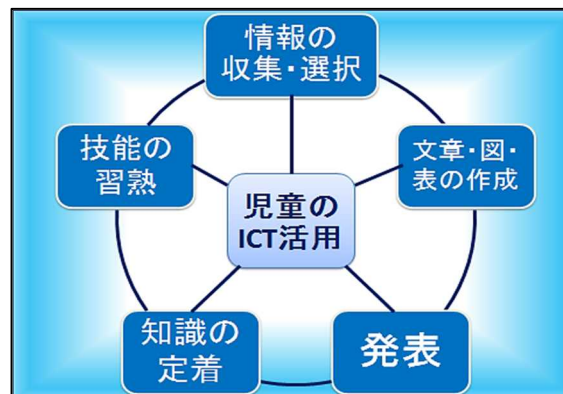


図5 児童のICT活用

(2) 「自ら考え、発信できる力」とは

「自ら考え、発信できる力」とは、各教科等の学習において、児童が追究活動を進んで行い、活動を通して培った自分の考えを整理し、分かりやすく相手に伝える能力であると捉える。

これらの能力は、図6に示すように、単元及び1単位時間を通して育成する能力であり、単元及び1単位時間の指導計画に基づき、児童が自ら「考える力」、「発信できる力」、それぞれの能力の育成を目標にした指導を行うようにする。そして、この

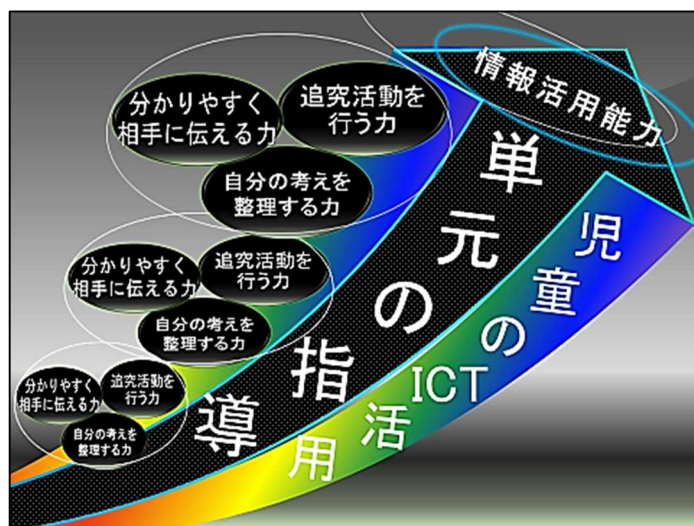


図6 「自ら考え、発信できる力」の育成

過程に、児童のICT活用を位置付けることで、更なる学習効果の向上が図られるものと考える。

(3) 「学習指導の工夫」とは

学習指導要領では、「生きる力」の構成要素である「確かな学力」を育むことが求められている。「確かな学力」とは、知識や技能はもちろんのこと、これに加えて、学ぶ意欲や自分で課題

を見付け、自ら学び、主体的に判断し、行動し、よりよく問題解決する資質や能力等までを含めたものである。児童にこの「確かな学力」を身に付けさせるに当たっては、問題解決的な学習を行うことが効果的であるといわれている。問題解決的な学習は、児童が自ら問題を把握し、問題解決の見通しを立て、情報を収集・解釈したり、自分の考えをまとめ、発表したりする活動が中心となる学習である。このような問題解決的な学習において、児童にICTを意図的・計画的に活用させれば、「確かな学力」と「情報活用の実践力」を育成できると考える。

「学習指導の工夫」とは、単元及び1単位時間の指導に、問題解決的な学習過程を取り入れ、児童が自ら「考える力」、「発信できる力」を育成することを目指した指導と児童のICT活用を明確に位置付け、教員と児童が学習のイメージを互いに共有できるような工夫を行うことである。

3 実態調査

(1) 実態調査の方法

調査時期	平成27年6～7月
対 象	本校（第5学年児童39人，教員10人），吉田南中学校（第1学年生徒81人，教員18人）
方 法	選択肢による質問紙法

(2) 結果

ア 児童・生徒を対象にしたアンケート結果から

図7～図9は本校児童による回答，図10～図14は、本校児童及び吉田南中学校生徒による回答結果である。

授業において、教員によるICT活用があった場合と、児童・生徒によるICT活用があった場合に、それぞれ感じたことを児童・生徒に質問したものである。

「授業の楽しさ」の問いでは、教員によるICT活用時及び児童によるICT活用時共に「とても楽しかった」、「楽しかった」と回答した割合が9割以上であった（図7）。

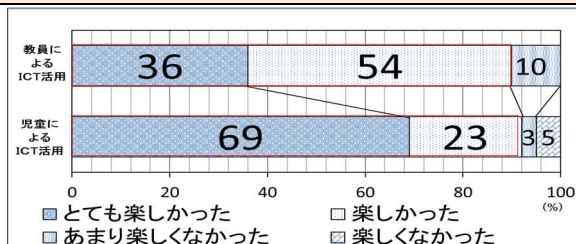


図7 授業の楽しさ

「授業の分かりやすさ」の問いでは、児童によるICT活用時より、教員によるICT活用時の方が「とても分かりやすかった」、「分かりやすかった」の合計が7ポイント高かった（図8）。

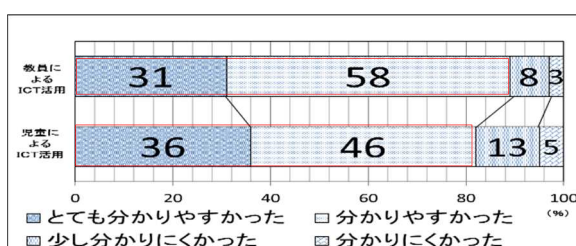


図8 授業の分かりやすさ

「授業に対するやる気」の問いでは、「とても出た」、「出た」と回答している児童が、教員による活用時より11ポイント高かった（図9）。

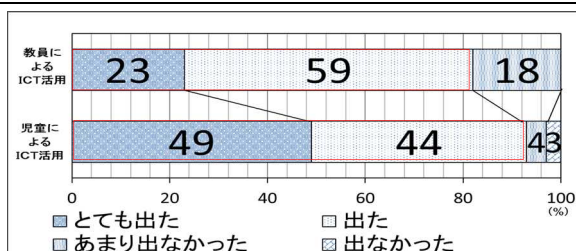


図9 授業に対するやる気

「ICT活用の好き・嫌い」の問いにおける児童と生徒との比較では、ICTを使ってまとめる学習を「好き」と回答した児童は85%と、生徒の73%より12ポイント高かった。また、ICTを使って発表する学習を「好き」とした回答は、児童に比べて生徒が14ポイント高かった（図10）。

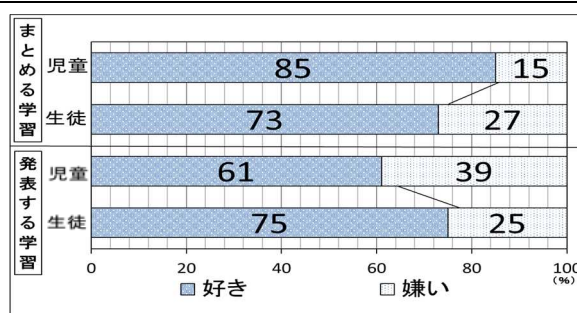


図10 ICT活用の好き・嫌い

図11・12は、図10でまとめる学習や発表する学習を「好き」と回答した児童・生徒に好きな理由を尋ねたものである。

「ICTを使ってまとめる学習が好きな理由」の問いでは、生徒は「まとめやすさ」、「仕上がりのきれいさ」の順に、児童は「まとめる学習の楽しさ」、「仕上がりのきれいさ」の順に回答数が多かった（図11）。

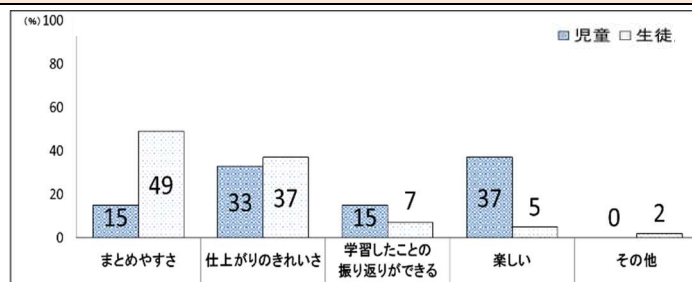


図11 ICTを使ってまとめる学習が好きな理由

「ICTを使って発表する学習が好きな理由」の問いでは、生徒は「発表がしやすい」、「自分の考えを相手に伝えやすい」が多かった。児童と生徒では理由に違いが見られた（図12）。

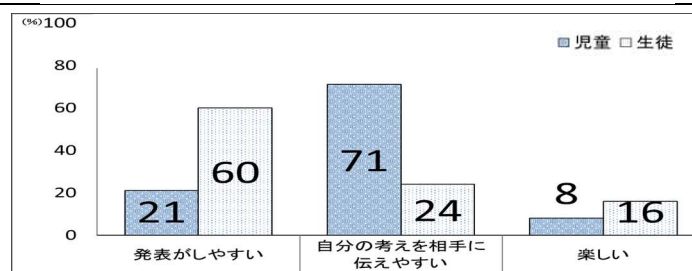


図12 ICTを使って発表する学習が好きな理由

図13・14は、図10でまとめる学習や発表する学習を「嫌い」と回答した児童・生徒に嫌いな理由を尋ねたものである。

「ICTを使ってまとめる学習が嫌いな理由」の問いでは、「まとめ方が分からない」、「手で書く方が速いから」と回答した児童が生徒より多かった（図13）。

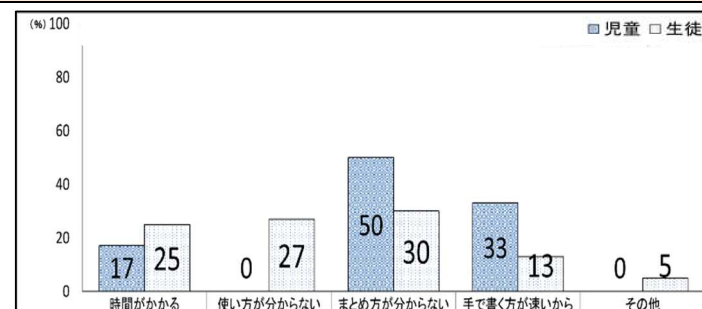


図13 ICTを使ってまとめる学習が嫌いな理由

「ICTを使って発表する学習が嫌いな理由」の問いでは、児童、生徒共に、「発表自体が恥ずかしい」と回答した数が最も多く、児童の方が生徒より16ポイント高かった（図14）。

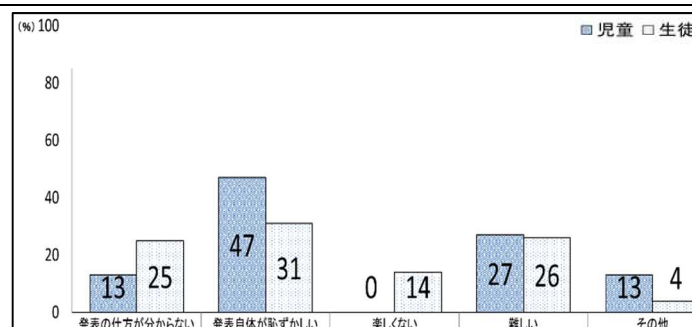


図14 ICTを使って発表する学習が嫌いな理由

イ 教員を対象にしたアンケート結果から

「教員がICTを使う理由」の問い(複数回答)では、「説明時間の短縮」、「分かりやすい授業」の順に高い割合であった(図15)。

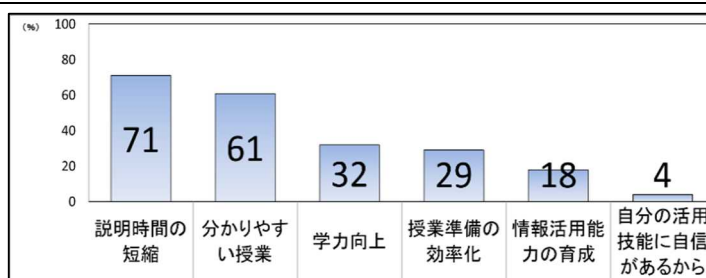


図15 教員がICTを使う理由

「教員が児童生徒にICTを使わせる頻度」の問いでは、「ほぼ毎日」21%、「週1回程度」32%、「月1回程度」29%であった。「学期1回程度」、「使わせていない」と回答した教員は、合わせて18%であった(図16)。

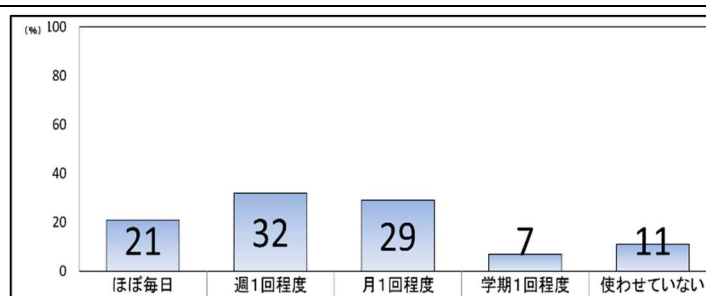


図16 教員が児童生徒にICTを使わせる頻度

「教員が児童生徒にICTを使わせる理由」の問い(複数回答)では、「授業の効率性」、「思考力・判断力・表現力を身に付けさせたい」、「情報活用能力の育成」の順に高い割合であった(図17)。

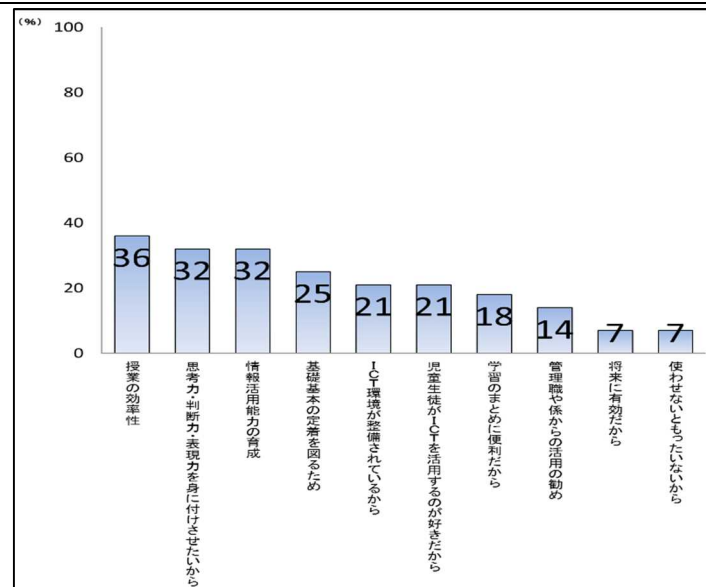


図17 教員が児童生徒にICTを使わせる理由

(3) 分析・考察

児童は、ICTを使うことに高い関心と意欲をもっている。しかし、生徒と比較すると、ICTを使うとまとめやすくなることや発表がしやすくなることに関しては、そのよさをまだ体感していないことが考えられる。児童には、活用の楽しさだけでなく、ICTを使うと学習したことがまとめやすくなったり、発表がしやすくなったり、ツールとしてのICTのよさを体感させる必要がある。まずは、児童の学習意欲を高めるためにも、教員は、児童によるICT活用をより積極的に推進していくことが必要であると考え。その際、教員は児童にICTを活用させるねらいを明確にし、児童に活動の見通しをもたせて、ICTを活用させていくことが必要であると考え。

また、児童によるICT活用時の学習意欲は高いものの、ICTを活用した発表を含め、発表自体に抵抗をもつ児童が多いことが分かった。この傾向は、第5学年児童だけでなく、中学年にも見られた傾向であった。発表への抵抗感を減らすことができるように、発達の段階に応じて計画的に発表しやすい雰囲気や場作り、発表のよさを体感できるような学習の機会を設定することが必要である。

4 情報活用の実践力の育成のための授業づくり

検証授業の実施に向け、情報活用の実践力の育成を目指す授業づくりの視点を図18のように考えた。

児童のコンピュータの基本的な操作スキルの育成も併せ、「課題や目的に応じた情報手段の適切な活用」、「必要な情報の主体的な収集・判断・表現・処理・創造」、「受け手の状況などを踏まえた発信・伝達」の三つの要素を単元の指導計画に位置付け、可能な限り児童がICTを活用する場面を設定することにより、児童のICT活用による情報活用の実践力の育成を図る必要がある。本研究では、情報活用の実践力の育成を行う視点として、

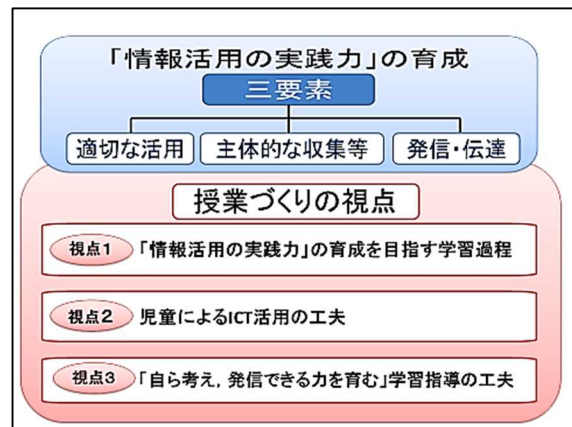


図18 情報活用の実践力の育成を目指す授業づくりの視点

- 視点① 情報活用の実践力の育成を目指す学習過程**
視点② 児童によるICT活用の場面の工夫
視点③ 自ら考え、発信できる力を育む学習指導の工夫

の三つを設定し、手立てを講じることとした。

(1) 視点① 情報活用の実践力の育成を目指す学習過程

図19は、情報活用の実践力を育成する本研究における授業デザインである。

本授業デザインでは、「必要な情報の主体的な収集・判断を行う」場面を「思考」、「収集・判断を通して得た情報を個人やグループで、文章や図・表に表現する」場面を「表現」、「表現した情報を発信する」場面を「発表」と位置付け、授業をデザインすることを提案し、研究を進めた。

情報活用の実践力の三つの要素を繰り返し育成できるように考え、「思考」、「表現」、「発表」の三つの場面を、単元及び1単位時間の指導計画に位置付けることで、教員が情報活用の実践力の育成についての見通しがもて、年間及び小学校6年間を通じて育成するカリキュラムを構成することができると考えた。

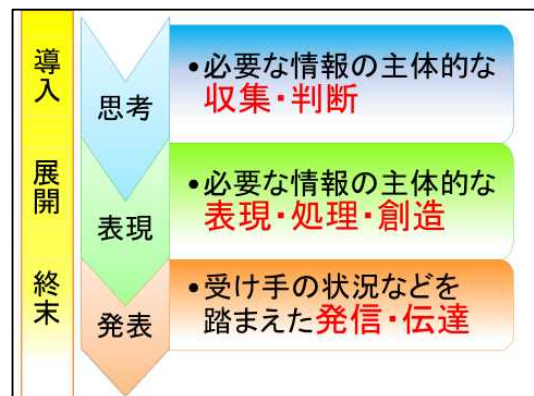


図19 「情報活用の実践力」の育成を目指す授業デザイン

(2) 視点② 児童によるICT活用の場面の工夫

校内のICT環境を有効に活用することを考え、児童がICT活用を行う場面を単元及び1単位時間の学習過程において可能な限り設定する。このようにICTを活用した実践的・体験的な学習活動に取り組ませることで、情報活用の実践力の向上が図られていくと考えた。

本研究では、本校に整備さ

表1 タブレット端末の特性と児童に活用させる利点

タブレット端末の特性	タブレット端末活用の利点（効果）
魅力あるツール	・ タブレット端末に「触りたい」、「触りたい」と、タブレット端末を使って学習したくなるという学習意欲につながる。
豊かな表現が可能	・ 文字、図、表、写真、映像を組み合わせたプレゼンテーションが可能である。
オールインワン	・ 1台で写真撮影から文書・スライド作成などが可能で、作成に掛ける時間の短縮化が可能である。 ・ 問題解決や課題追究に取り組むなどの児童が主体になる学習に適している。
操作が容易	・ 「指で触れる」、「操作する」などの直接的・直感的な操作が可能であり、画面の拡大・縮小、書き込みなどの操作に応じて画面や内容が変化する。

れているICT機器の中でも、タブレット端末の有効活用を考え、実践に取り組んだ。表1は、児童にタブレット端末を活用させる利点をまとめたものである。

タブレット端末は、1台で撮影・録画から文書・スライド作成などができる、まさに「オールインワン」のICT機器である。また、見ただけで「触れたくなる、操作したくなる」という魅力のあるツールである。さらに、コンピュータ（ノート型パソコン）より操作は易しく、操作技能の習得に掛ける時間の短縮化も図られる。

タブレット端末を活用した学習に取り組ませる際は、画面に提示された情報を共有し、ペアやグループ間で互いに意見を出し合いながら、必要な情報を記録（写真や動画の撮影）し、画面を拡大して利用したり、画面に直接書き込んだりするようにした。このように、タブレット端末の特性を生かし、一連の活動を短時間で行えるように工夫することで、活動の効率化を図れるようにした。

さらに、授業を構想する際は、タブレット端末のこれらの特性や、アナログ（紙）とデジタル（ICT）のそれぞれがもつよさを生かした授業を検討するようにした。

(3) 視点③ 自ら考え、発信できる力を育む学習指導の工夫

問題の設定、解決、発表という一連の学習活動の中で、児童一人一人に役割を担わせるとともに、KJ法的な手法やジグソー学習を用いた学習過程を取り入れた。これらの手法を用いる際は、視点②との関連を図りながら、授業展開を工夫するようにした。このことにより、児童の思考力、判断力、表現力等を高め、児童自ら考え、発信できる力を育むことができるのではないかと考え、学習指導の工夫について、次のように構想した。

複数の児童に議論させる場面では、KJ法的な手法により、付箋紙と模造紙（アナログ）を用い、思考を可視化し、分類・整理する過程における議論の活性化を図った。また、児童が「思考」、「表現」、「発表」する場面では、ジグソー学習の学習過程を取り入れ、児童の主体的、協働的な学びを促すようにした。

必要な情報の主体的な収集を行う「思考」の場面では、ジグソー学習の学習過程であるエキスパート活動を展開し、アナログ（紙）とデジタル（ICT）を併用した情報収集に取り組ませた。そして、エキスパート活動を通して得た知識や情報は、「表現」、「発表」の場面において、ジグソー学習の学習過程であるホームグループ活動・クロストーク活動で活用させた。また、発表の目的や受け手を意識した情報発信と、発信者及び受け手による双方向の意見の交流を行わせるようにした。

「ジグソー法は、^①あるテーマについて複数の視点で書かれた資料をグループに分かれて読み、^②自分なりに納得できた範囲で説明を作って交換し、^③交換した知識を統合してテーマ全体の理解を構築したり、テーマに関連する課題を解いたりする活動を通して学ぶ、協調的な学習方法の一つです。」

今回は、おおよそ、^①をエキスパートグループ活動、^②をホームグループ活動、^③をクロストーク活動として、学習活動に取り入れて、実践を行った。

CoREF 推進機構より引用。（①、②、③は、筆者の加筆）

5 検証授業の実際と考察

本研究では、児童のICT活用による情報活用の実践力の育成を目指して、実態把握を行い、課題に対する学習指導について構想してきた。そこで、研究の仮説を検証するため、2回にわたって、検証授業を実施した。

【検証授業Ⅰ】（平成27年6月～7月）

- 第6学年社会科（タブレット端末を活用した情報の収集と発信）
- 第5学年家庭科（コンピュータを活用した情報の創造と発信）

【検証授業Ⅱ】（平成27年11月）

- 第5学年社会科（タブレット端末を活用した情報の収集と創造、発信）

(1) 【検証授業Ⅰ】第6学年社会科

単 元	「3人の武将と天下統一」
実施学級	第6学年1組37人
実施時間	6時間

ア 単元のねらい

単元	情報活用の実践力
戦国の世が、織田信長、豊臣秀吉、徳川家康の3人の武将たちによって統一されたことに、学習問題を見出し、戦国の世が統一されたことやそれに関わる織田信長、豊臣秀吉、徳川家康の願いや働き、代表的な文化遺産の意味について思考・判断したことを適切に表現できるようにする。	問題を解決するために情報を収集し、収集した情報を選択、判断し、その情報（文章や図・絵、画像等）を組み合わせ整理して、受け手の立場や環境を考え、伝えたいことが分かるように、自分の考えをまとめて発信することができるようにする。

イ 指導計画（全6時間）

過程	主な学習活動	実践力 育成の場面	実践力育成のポイント	児童によるICT活用 (活用機器・コンテンツ)
つかむ ・ 見通す	1 戦国大名の勢力地図を比べたり、「長篠合戦図屏風」を見たりして、いろいろな気付きや感想をもつ。(第1時)	思考 ・ 発表	【情報の主体的な収集】 ・ タブレット端末を活用し、必要な情報 (PDF資料) の閲覧や、デジタルコンテンツ (NHK for School) の視聴に取り組みませた。児童に、タブレット端末を活用させることで、学習意欲を高め、収集すべき情報を効率よく、収集できるようにした。	・ PDF資料閲覧 (タブレット端末) ・ 発表 (実物投影機、大型テレビ)
	2 「長篠合戦図屏風」, 「江戸城図屏風」を比べ、二つの図屏風が描かれた間の60年間について予想し、学習問題を設定する。(第2時) 3人の武将は、どのように戦国の世をまとめていったのだろう。			・ PDF資料閲覧 (タブレット端末)
調べる	3 資料をもとに、個人やグループで調べ、全体で話し合う。【ジグソー学習】	思考 ・ 発表	【受け手の状況を踏まえた情報の発信・伝達】 ・ グループ活動で再構成した情報を、学級全体で共有できるようにした。 ・ 学級全体に分かりやすく伝えられるように、電子黒板 (大型テレビ) にグループ分の情報を一覧表示したり、ピックアップして比較表示したりするなど、児童用タブレット端末と電子黒板・大型テレビを活用した発信を行い、見やすく提示できるようにした。	・ 記録 (タブレット端末) ・ 発表 (大型テレビ)
	(1) 織田信長は、どのような世の中を目指していたのか。(第3時)			・ デジタルコンテンツの視聴・記録・発表 (タブレット端末)
	(2) 豊臣秀吉は、どのような世の中を目指していたのか。(第4時)			・ デジタルコンテンツの視聴・記録・発表 (タブレット端末)
	(3) 徳川家康は、どのような世の中を目指していたのか。(第5時)			・ 記録 (タブレット端末) ・ 発表 (電子黒板)
まとめる ・ 生かす	4 調べたことを基に、学習問題についてまとめる。 5 天下統一のパートナーとして、誰を選ぶか考え、話し合う。(第6時)	発表		・ 記録 (タブレット端末) ・ 発表 (電子黒板)

ウ 情報活用の実践力の育成を目指す授業づくり

(ア) 視点① 情報活用の実践力の育成を目指す学習過程

図20は、本単元における授業を構想し、まとめたものである。

「思考」の場面では、教員が作成・配布した資料を、児童がタブレット端末を活用して閲覧したり、NHK for Schoolのデジタルコンテンツを視聴したりする活動を通して、情報の収集・判断の能力の育成を図れるようにした。

「表現」の場面では、習得した内容（知識）をグループ間で報告し、ワークシートに記入する活動を通して、収集した情報を要約する能力の育成を図れ

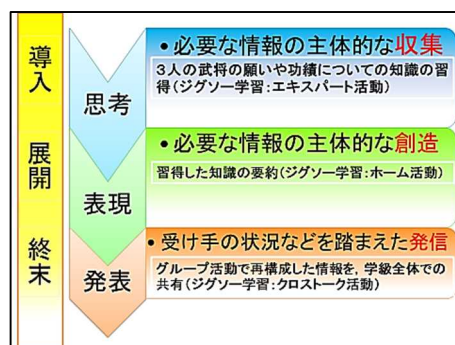


図20 検証授業Ⅰ「3人の武将と天下統一」
授業デザイン

るようにした。

「発表」の場面では、「表現」の場面で再構成した情報等を学級全体で共有できるように、受け手の状況などを踏まえた発信や双方向における情報等のやりとりがなされるようにした。

(イ) 視点② 児童によるICT活用の方面の工夫

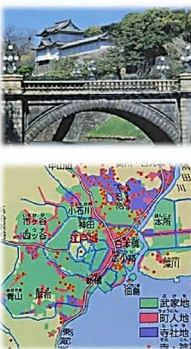
「思考」の場面では、アナログとデジタルのよさを生かせるように、紙媒体による資料（以下、「紙資料」と表記）のみ、「紙資料とデジタルコンテンツ（NHK for School）の併用」の二つの方法による情報収集に取り組みさせた。

図21は、第5時のエキスパート活動で使用した紙資料である。ジグソー学習を取り入れたグループによる学習問題の答えを導き出す過程で、特にエキスパートグループの学習活動を深めることを重視して、エキスパート活動資料の作成を行った。

エキスパート活動では、学習問題の答えを出すために必要な情報の収集に取り組みさせた。

家康の作戦 A：江戸城

秀吉の命令で、関東地方に移された家康は、江戸（東京）に移って、関東を治め、朝鮮に兵を送ることなく、力をたくわえていました。



関守閣は、江戸時代の初めに火事で失われ、その後再建されませんでした。明治時代以降は、天皇の住まいである皇居となっています。

当時の江戸は、水はけの悪い所だったため、入り江や運河に土を入れてうめ立てたり、運河を新たに作りだしたりする大きな工事も行われました。大名や家臣の住むやしきなども建てられ、寺や神社の場所や、町人の住む場所が整えられました。

限られた時間内で、調べられるように、要点を簡潔にまとめた。

資料を読んで、視覚的に捉えられるように、イラスト、写真、図等を入れた。

社会的な事象について、さらに理解が深まるように、イラスト、写真等に注釈を付け、主体的に学習を進められるようにした。

図21 エキスパート活動資料

(ウ) 視点③ 自ら考え、発信できる力を育む学習指導の工夫

本単元では、KJ法的な学習の手法（1時間）、ジグソー学習（3時間）を行った。

本学級の児童にとって、初めてのジグソー学習である。学習の進め方については、授業を通して指導してきた。ジグソー学習におけるエキスパート活動（課題別追究活動）については、五つのエキスパートグループを設定し、実践してきた。

図22は、第5時「徳川家康の作戦」の学習時におけるホームグループ・エキスパートグループの構成図である。表2に示したように、織田信長、豊臣秀吉、徳川家康の3人の武将が行った政策や戦い等を「作戦」と捉えさせ、3人の共通のカテゴリーとして「城」、「戦い」、「政策」、「外交」、「エピソード」の五つを設定し、3人の武将に関する知識の収集に取り組ませるようにした。



図22 ジグソー学習のグループ構成図

表2 エキスパート活動のカテゴリー

武将	A 城	B 戦い	C 政策	D 外交	E エピソード
織田信長	安土城	天下布武	楽市・楽座	キリスト教	・大うつけ ・新しい時代の担い手等
豊臣秀吉	大阪城	刀狩	検地	朝鮮出兵	・出自・派手好き等
徳川家康	江戸城	関ヶ原の戦い	江戸幕府	朱印船貿易	・人質時代等

エ 指導の展開

情報活用の実践力の育成における「必要な情報の主体的な収集、判断」、「受け手の状況などを踏まえた発信」を単元の指導計画に重点化して位置付け、可能な限り児童がICTを活用する場面を設定した。

ここでは、第1時、第5時の授業の実際を取り上げて、「学習活動」、「児童によるICT活用の場面」、「指導上の留意点」について述べる。

【第1時】 情報の主体的な収集（思考），電子黒板を用いた発信（発表）

【第5時】 情報の主体的な収集，判断，選択（思考）

（★：情報活用の実践力育成に関わること）

【第1時】 情報の主体的な収集（思考），電子黒板を用いた発信（発表）

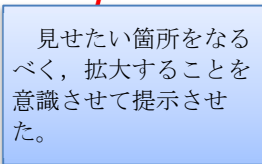
主な学習活動	児童による ICT 活用の場面	指導上の留意点
戦国大名の勢力地図を比べたり、「長篠合戦図屏風」を見たりして、いろいろな気付きや感想をもつ。 グループで得た気付きや感想を KJ 法的な手法で集約する。	 写真1 PDF 資料を閲覧する様子	★ 児童用タブレット端末を、グループで1台（5人に1台）活用させた。
 写真2 KJ 法的な手法を用いた集約 グループで集約したものを、グループごとに、学級全体へ発表する。	 見せたい箇所をなるべく、拡大することを意識させて提示させた。	★ 実物投影機を用いて、学級全体への発表を児童に操作させながら行わせた。

図23 児童による提示

【第5時】 情報の主体的な収集，判断，選択（思考）

主な学習活動	児童による ICT 活用の場面	指導上の留意点
徳川家康は、どのような世の中を目指していたのかについて調べる。【ジグソー学習】 エキスパート活動 五つのグループに分かれて、担当する課題について調べ学習を行い、知識を得る。 A：江戸城 B：関ヶ原の戦い C：江戸幕府 D：朱印船貿易 E：エピソード、人質時代等	【ねらい】 自分の担当する課題について、調べ学習を行い、知識を得る。	★ エキスパート活動では、教員が作成した紙資料と、各エキスパートグループに1台ずつ配布したタブレット端末を活用し、デジタルコンテンツ（NHK for School）を併用して、徳川家康が行った政策等について、情報収集させた。



写真3 エキスパート活動①
(紙資料を読み合う)

ホームグループ活動

- 各エキスパートが報告した内容を、ワークシートに書き込む。



写真5 ホーム活動

クロストーク活動

- ①ホームグループ活動で得た五つの知識を構成し、各個人で学習問題の答えを出す。②ホームグループごとに集約した答えを全体で発表する。③各グループの発表を聞いて、自分が出した答えと比較する。



写真4 エキスパート活動②
(デジタルコンテンツの視聴)

児童がすぐにコンテンツを視聴できるように、付箋に調べるサイトを示しておき、グループごとに異なるコンテンツを視聴させた。

【エキスパートグループ別 視聴コンテンツ】
 A:『歴史にドッキリ『徳川家康』 シーン06・07
 B:『歴史にドッキリ『徳川家康』 シーン01
 C:『歴史にドッキリ『徳川家康』 シーン04・05
 D:クリップ教材「朝鮮半島と日本」
 E:クリップ教材「安土桃山文化」

報告は、1人1分程度で行わせ、報告で分からない点は、質問するなどして、確実に解決するようにさせた。



写真6 カメラ機能を用いた記録

【ねらい】
大型テレビに提示するために、映したい箇所を拡大して記録させる。

★ 各グループに児童用タブレット端末を1台ずつ(5人に1台)を配布し、活用させた。

(2) 【検証授業Ⅰ】第5学年家庭科

単 元	「見つけよう、かたづけよう—スッキリ整理整とん、身の回り—」
実施学級	本校第5学年1組42人
実施時間	4時間

ア 単元のねらい

単 元	情報活用の実践力
身の回りを快適に整えることができるように考えたり、自分なりに工夫したりすることができる。	収集した情報を選択、判断し、その情報(絵、画像等)を組み合わせて、受け手に伝えたいことが分かるように、自分の考えをまとめて発信することができるようにする。

イ 指導計画(全4時間)

過程	主な学習活動	実践力育成の場面	実践力育成のポイント	児童によるICT活用(活用機器・コンテンツ)
つかむ・見通す	1 学校で使っている引き出しを使って、引き出しの整理・整頓の手順(ヒント)についてグループで話し合う。(第1時)	思考・表現	【情報の主体的な収集】 ・整理・整頓を行った引き出し、身の回りを、タブレット端末や撮影機能のある情報機器を用いて、写真に記録させた。 ・部屋の整理・整頓の手順(ヒント)についての情報を資料(自作)・ビデオ等のメディアから情報を集める。	・記録(タブレット端末)
	2 自分が使っている引き出しを用いて、整理・整頓を行う。(第1時)			
調べる・確かめる	3 部屋の整理・整頓の手順(仕方)のコツを調べる。【ジグソー学習】(第2時)	思考・発表	【情報の主体的な創造】 ・家庭で実践した整理・整頓について報告する内容を吟味しながら、受け手に伝わりやすいスライドを作成させた。	・デジタルコンテンツの視聴(大型テレビ) ・記録(デジタルカメラ等)
	家庭で 我が家のスッキリを実行しよう。(各家庭での実践)			
生活に生かす	4 「我が家のスッキリ」報告会に向けて、プレゼンテーションを作ろう。(第3時)	表現・発表	【受け手の状況を踏まえた情報の発信・伝達】 ・グループの友だちに家庭での実践について、受け手の反応を見ながら、報告させた。	・スライド作成(コンピュータ、ソフト) ・プレゼンテーション(コンピュータ)
	5 「我が家のスッキリ」報告会をしよう。(第4時)			

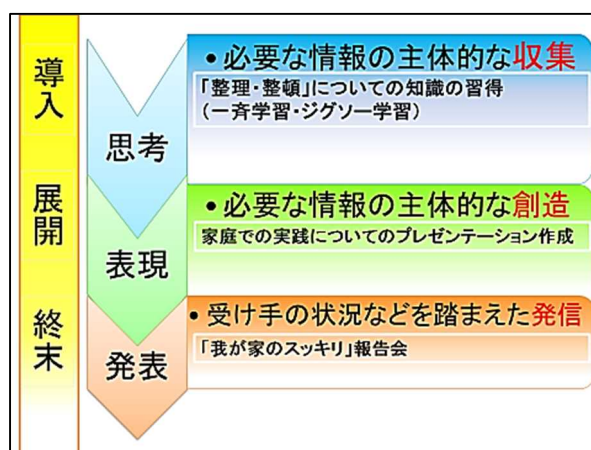
ウ 情報活用の実践力の育成を目指す授業づくり

(ア) 視点① 情報活用の実践力の育成を目指す学習過程

本検証授業では、「表現」、「発表」の場面における、児童のICT活用による情報活用の実践力の育成を図ることをねらいとした授業デザインを構想した(図24)。

導入では、一斉学習(第1時)やジグソー学習(第2時)において、「整理・整頓」についての知識の習得を図った。

展開では、児童のICT(ノート型パソコン)活用によるスライド作成(第3時)及び発表(第4時)に取り組みせ、整理・整頓の手順についての知識の習得と活用を図った。



(イ) 視点② 児童によるICT活用の場面の工夫

本検証授業では、視点で述べた情報活用の実践力の育成を目指す学習過程「思考」、「表現」、「発表」の場面で児童によるICT活用として、以下の活動に取り組みさせた。

「思考」の場面では、タブレット端末(グループに1台)を活用した撮影と、「整理・整頓」についての知識を得るためのデジタルコンテンツの視聴に取り組みさせた。「表現」の場面では、家庭で行った実践を報告を行うため、コンピュータ(1人1台)とプレゼンテーションソフトを活用したスライド作成に、「発表」の場面では、家庭で行った実践についてプレゼンテーションを行わせることで、情報活用の実践力の育成を図った。

(ウ) 視点③ 自ら考え、発信できる力を育む学習指導の工夫

本単元では、第1・2時に整理・整頓の手順(仕方)について、知識を得る学習活動を設定した。児童は得た知識を生かし、家庭での整理・整頓の実践を行う。その実践の様子については、保護者に写真撮影及び授業への提供を依頼した。撮影したデータは、単元終末の「我が家のスッカリ報告会」での発表に向け、活用させるようにした。

児童一人一人の整理・整頓の課題に対して、授業で獲得した知識を生かし、「身の回りのどの場所に、どのような整理・整頓の課題があり、その課題を解決するために、どのような工夫を行い、どのように整理・整頓の課題が解決されたか」について思考し、問題解決(整理・整頓)したことをプレゼンテーションする機会を設定することで、「自ら考え、発信できる力」の育成を図った。

エ 指導の展開

本単元では、情報活用の実践力の育成における「必要な情報の主体的な創造」、「受け手の状況などを踏まえた発信」を単元指導計画に位置付け、可能な限り児童がICTを活用する場面を設定した。ここでは、第1時、第3時、第4時の授業の実際を取り上げて、「学習活動」、「児童によるICT活用の場面」、「指導上の留意点」について述べる。

- | | |
|-------|---------------------|
| 【第1時】 | 情報の主体的な収集(思考) |
| 【第3時】 | 情報の主体的な創造(表現) |
| 【第4時】 | 受け手の状況などを踏まえた発信(発表) |

(○：教科の指導に関わること，★：情報活用の実践力育成に関わること)

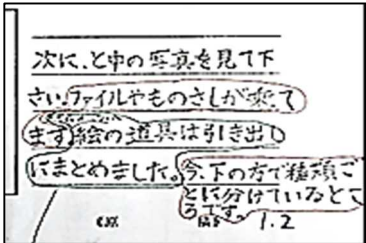
【第1時】 情報の主体的な収集（思考）

主な学習活動	児童による ICT 活用の場面	指導上の留意点
1 学校で使っている引き出しをヒントに、整理・整頓の手順（仕方）についてグループで話し合う。 2 1で学習した「スッキリさせるためのコツ」を用いて、机の引き出しの整理・整頓を行う。  写真7 引き出しの整理・整頓に取り組む様子	【ねらい】 整理・整頓前と整理・整頓後の引き出しの写真を撮影し、比較させる。  写真8 タブレット端末を用いた記録	★ 各グループに児童用タブレット端末を1台ずつ（5人に1台）を配布し、活用させた。  写真9 児童が記録した引き出しの写真

【時間外：家庭で】 情報の主体的な収集（思考）

主な学習活動	児童による ICT 活用の場面	指導上の留意点
自分がよく使う部屋を調査し、学習した知識を用いて、家庭実践を行う。〈各家庭〉	 写真10 家庭での整理・整頓の様子	★ 整理・整頓（前・中・後）の実践の様子について、写真での記録と提出を保護者にお願いした。

【第3時】 情報の主体的な創造（表現）

主な学習活動	児童による ICT 活用の場面	指導上の留意点
- 各家庭で実践したことを報告するためのスライドを作成する。 (1) キューブキッズ*を起動し、ログインする。 (2) 電子紙しばいを起動し、整理・整頓の写真をコンピュータに取り込む。 (3) 発表原稿を作る。  写真12 児童ワークシート（発表原稿） (4) 発表練習を行う。	 写真11 スライド作成の様子  図25 家庭での整理・整頓実践の記録	★ コンピュータを1人に1台活用させ、キューブソフトを用いたスライド作成に取り組ませた。 ★ 家庭で記録した写真3枚を、①「はじめ」（整理・整頓前）、②「中」（整理・整頓途中）、③「終わり」（整理・整頓終了時）の順番で、挿入、並び替えに取り組ませた。 ○ 「場所」、「課題」、「工夫した点」、「解決した点」の4点について話すことを条件に発表原稿の作成に取り組ませた。 ★ コンピュータを操作しながら、スムーズに話せることを心掛けた練習に取り組むように指示した。

【第4時】 受け手の状況などを踏まえた発信（発表）

主な学習活動	児童による ICT 活用場面	指導上の留意点
- 家庭で実践したことを報告する。 (1) 報告会 (グループごとに) (2) 感想交流 【ねらい】 受け手に伝わる、分かりやすい報告を心がけた発表をさせた。	 写真 13 報告会の様子	★ 発表の様子をタブレット端末を用いて、動画撮影させた。 動画撮影したものは、後日の学級 PTA で、保護者に視聴していただいた。 ★ 受け手を見て、大きめの声量で話すことを意識させた。

(3) 【検証授業Ⅰ】分析・考察

学習内容についてアンケートを実施した。

ア 成果と課題（○：成果，▲：課題）

(7) 視点① 情報活用の実践力の育成を目指す学習過程

- 「思考」、「表現」、「発表」の三つの場面を意識した単元の指導計画を作成したことで、児童によるICT活用をどの場面で実践するかを学習指導案に明示し、実践することができた。
- 「思考」、「表現」、「発表」のどの場面に重点を置き、児童による ICT 活用と情報活用の実践力の育成を目指すかを明らかにすることができた。具体的には、第6学年社会科（以下、6年社会）では、3人の武将に関する知識についての情報収集を行う「思考」の場面、第5学年家庭科（以下、5年家庭）では、各家庭で取り組んだ身の回りの整理・整頓の実践について、「表現」と「発表」の場面に重点を置いた指導を行うことで、児童のICT活用を通じた情報活用の実践力に取り組ませることができた。
- ▲ 全体での発表が、ホームグループごとの単なる報告で終わってしまった。発信者と受け手による意見の交流をさらにもてるような指導・支援の工夫が必要である。

(4) 視点② 児童によるICT活用場の工夫

- 紙資料とデジタルコンテンツを併用したことで、児童の理解を深めることができた。また、「3人の武将」（信長・秀吉・家康）に関わる「城・政策・外国との関係」等の知識・理解を問う事後アンケートでは、平均点9点（10点満点）という結果だった。（6年社会）
- 事後アンケートで、「タブレットを使ったら、とても分かりやすくなった。」という感想を得た。エキスパート活動時における紙資料（自作）とデジタルコンテンツを併用するなどの工夫を行ったことで、児童の学習意欲を高めることができた。（6年社会）
- 児童によるICT活用場面として、コンピュータ（ノート型パソコン）を活用した表現と発表の場面を設定した。1人1台のノート型パソコンと授業支援ソフトを活用したことで、短い時間でスライドの作成及び発表を行うことができた。（5年家庭）
- ▲ 検証授業Ⅰでは、グループに1台のタブレット端末の活用だった。児童によるICT活用場面として、ペアで1台活用できるような学習活動の工夫を行いたい。

(5) 視点③ 自ら考え、発信できる力を育む学習指導の工夫

- 「信長の作戦」、「秀吉の作戦」、「家康の作戦」、「天下統一を目指すとしたら、どの武将をパートナーに選ぶか」といった児童の興味を高められるような学習問題を提示することで、児童の意欲を喚起することができた。事後アンケートでは、「このような学習（興味を高められるような学習問題のある学習）を授業でたくさんしたい。」という感想を得た。（6年社会）

- エキスパート活動と、小集団の中で発表させるホーム活動を組み合わせた学習活動を展開したことで、一人一人が自分の役割を認識し、友達と共に学習を進め、教え合うなど、協働的に学ぼうとする姿勢が見られた。(6年社会)
- 事後アンケートで、「一人じゃ分からないことも、みんなで活動すると分かる。」という感想を得た。(6年社会)
- ▲ 5年家庭については、ジグソー学習が1時間のみの実施であったこともあり、学習の進め方を理解する間もなく、次の学習内容に進めざるを得なかった。児童にとって経験の少ない学習指導法は、児童に繰り返し取り組ませて、徐々に慣れさせることができるような単元の指導計画を作成することが大切である。
- ▲ 全体での発表を行う際、発表者が偏ってしまった。教員が意図して輪番で発表させるなどして、児童全員が全体での発表の機会を体験できる工夫が必要である。
- ▲ 全体での発表が、ホームグループごとの単なる報告で終わってしまった。発信者と受け手による意見の交流を更にもてるような指導・支援の工夫が必要である。

イ 考察

(7) 第6学年社会科

学習指導の工夫として取り組んだジグソー学習で、アナログ・デジタルを併用した情報収集をエキスパート活動に取り入れたことで、児童の学習意欲の向上を図ることができた。また、ホームグループ活動や話し合い活動を通して、児童一人一人が得た知識を再構成し、自分の知識としての定着が図られたことも、事後のアンケートから把握することができた。全体発表の場では、一方通行の単なる報告会で終わってしまったことから、発信者と受け手による意見の交流の場を設定し、立場を変えても、発信者・受け手の間で言葉のキャッチボールがなされるような双方向型の授業デザインを工夫することが必要である。

(4) 第5学年家庭科

学習を通して得た知識、家庭での実践について報告するプレゼンテーションを行う学習を設定したことで、児童の学習意欲の向上を図ることができた。また、第4時の「家庭での実践報告会」においても、コンピュータの操作を自身で行いながら、児童は受け手の状況を見て、聞きやすい声量や速さを意識したプレゼンテーションを行うことができた。今回の学習活動を通して、ICTを使う楽しさ、面白さやよさを児童が体感することができた。

以下は、検証授業Ⅰを経て、まとめた三つの課題である。

- 【課題1】 発信者・受け手が共に、発信・受信の立場を経験する双方向型の発信・伝達を行うような授業デザインを工夫すること
- 【課題2】 単元の指導計画に「情報の収集・判断・表現、処理・創造、発信・伝達」の要素を盛り込み、教員と児童との間で「明確な活用イメージ」を共有すること
- 【課題3】 タブレット端末と電子黒板、大型テレビを連携して活用し、情報共有や意見交換を効果的に行うこと

(4) 【検証授業Ⅱ】第5学年社会科

検証授業Ⅱでは、研究の仮説の検証及び、検証授業Ⅰの課題の解決を図ることをねらいとして授業を行った。

単元全体を通して、「情報活用の実践力」に関わる能力全般の育成を意図した授業デザイン、児童によるICT活用の場面を可能な限り設定することで、児童が主体的に問題解決に取り組めるようにするとともに、情報活用の実践力を育成できるようにした。

ア 学年・教科 第5学年社会科

単 元	「自動車をつくる工業」
実施学級	本校第5学年1組39人
実施時間	9時間

イ 単元のねらい

単元	情報活用の実践力
自動車をつくる工業を通して、我が国の工業生産について意欲的に調べ、自動車産業に従事している人々の苦労や努力、工業生産を支える貿易、運輸などの働きを理解するとともに、国民生活を支える我が国の工業生産を関連付け、考えたことを適切に表現する。	問題を解決するために情報を収集し、収集した情報を選択、判断し、その情報（文章や図・絵、画像等）を組み合わせ整理して、受け手の立場や環境を考え、伝えたいことが分かるように、自分の考えをまとめて発信することができる。

ウ 指導計画（全9時間）

過程	主な学習活動	実践力育成の場面	実践力育成のポイント	児童によるICT活用（活用機器・コンテンツ）
つかむ・見通す	1 身近な乗り物「自動車」について、自動車の部品、グラフを見て気付いたことや疑問に感じたことを話し合う。（第1時）	思考・発表	【情報の主体的な収集】 - より効率的な情報の収集が行えるように、児童用タブレット端末をペアで1台使えるように準備した。 - 自動車の製造に関する教員自作のPDF資料をタブレット端末で閲覧させ、必要な情報を集めさせた。 【情報の主体的な表現・創造】 - タブレット端末、授業支援アプリを用いて、自動車づくりのよさを宣伝するコマーシャルづくりに取り組ませた。	PDF資料閲覧（タブレット端末）
	2 日本の自動車が世界で売れている理由について、予想を立てる。（第2時） 学習問題 自動車づくりにたずさわる人々は、よりよい自動車をつくるために、どんな工夫や努力をしているのだろうか。			発表（実物投影機、電子黒板）
調べる	3 日本の自動車の製造過程について調べ、工夫や努力について知る。（第3時）	思考・表現・発表	- 発表の意図に合う適切な写真やイラストを教科書や資料集の中から選ばせ、スライドに必要な写真や絵等を画像に記録させた。 - プレゼンテーションソフトを用いて、文章や写真をレイアウトし、4枚のスライドを作成させた。 【受け手の状況を踏まえた情報の発信・伝達】 - ペアで作成したスライド（自動車づくりのよさコマーシャル）を学級全体で共有できるように電子黒板、各児童用タブレット端末に提示させた。 - 発信者は、コマーシャルのキャッチフレーズや名付けた根拠、スライドに用いた写真等について、受け手の反応を見ながら話をさせるようにした。 - 受け手には、発信者に対して、分かったことや感想、要点をまとめた質問を行わせ、発信者は受け手の質問等に適宜回答させた。	- デジタルコンテンツ（電子黒板） - スライド作成（タブレット端末）
	4 よりよい自動車を効率よくつくるための工夫や努力について調べ、生産性や安全性を高めるための自動車製造について理解する。【ジグソー学習】（第4時）			- PDF資料閲覧（タブレット端末） - 記録・発表（タブレット端末、電子黒板）
	5 関連工場では、自動車の部品がどのようにつくられているのかを調べ、調べたことをもとに、組み立て工場と関連工場との関係を整理してまとめる。【ジグソー学習】（第5時）			- PDF資料閲覧（タブレット端末） - 記録・発表（タブレット端末、電子黒板）
	6 完成した自動車がどのようにして消費者のもとへ届けられるのかを調べ、調べたことを整理して、図や言葉でまとめる。【ジグソー学習】（第6時）			- PDF資料閲覧（タブレット端末） - 記録・発表（タブレット端末、電子黒板）
	7 人と環境にやさしい自動車づくりについて調べる。【ジグソー学習】（第7時）			- PDF資料閲覧（タブレット端末） - スライド作成、記録（タブレット端末）
まとめる	8 学習したことを生かして、自動車づくりにたずさわる人々の工夫や努力等をコマーシャルにまとめる。（第7時）	表現		
生かす	9 「日本の自動車、ここがいいです。」日本の自動車、コマーシャル発表会を行い、日本の自動車づくりのよさについて考える。（第8時・第9時）	発表		プレゼンテーション（タブレット端末、電子黒板）

エ 情報活用の実践力を育成するための授業づくり

(ア) 視点① 情報活用の実践力の育成を目指す学習過程

図26は、検証授業Ⅱの授業デザインである。

また、検証授業Ⅱにおいては、ICT活用のイメージをより明確にするために、学習指導案の様式についても改善を図った（図27）。

具体的には、「5W1H」を意識し、①「Who: 誰が?」、②「When: どの学習過程で?」、③「Where: どの教室・場所で?」、④「What: 何を? (どんなICTを?)」、⑤「Why: なぜ児童にICTを活用させるのか? (理由)」, ⑥「How: どうやって?」の六つの項目を意識した学習指導案の作成に留意した。

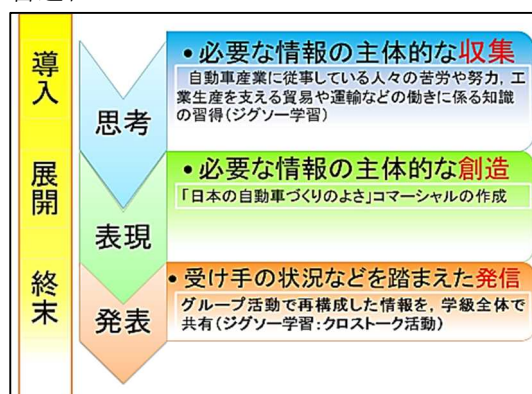


図26 検証授業Ⅱ「自動車をつくる工業」授業デザイン

小単元「自動車をつくる工業」第2時 平成27年10月29日（木）5校時		
⑤	目 標	日本の自動車が世界で売れている理由について、予想を立てることができる。
	情報活用の実践力の育成	児童が立てた予想を、タブレット端末を用いて表現し、電子黒板に提示して発表することができる。
	評価基準	日本の自動車が世界で売れている理由を考え、学習問題を見出し、予想を立て、学習計画を立案し表現している。 【社会的な思考・判断・表現】
③	授 業 場 所	■普通教室 □特別教室 (ICT室) □体育館 □運動場 □その他 ()
	授 業 形 態	□講義形式 ■一斉学習 ■グループ学習 □個別学習
①	ICT 活 用 者	■指導者 ■児童 □その他 ()
⑧	ICT 活 用 の 目 的	■資料の提示 (指導者) □グループの考えをまとめる □学習内容を調べる □デジタルコンテンツの視聴 □記録 (写真・動画等) □プレゼンテーション等の作成 ■資料の提示 (学習者) ■自分の考えをまとめる ■PDF資料の閲覧 ■他者との考えの比較・交流 □学習の振り返り
④	活 用 機 器	■電子黒板 ■指導者用タブレット端末 (Windows) □実物投影機 ■児童用タブレット端末 (Windows) □その他 ()
	活用コンテンツ	「JFTCキッズサイト」(一般社団法人日本貿易会ホームページ www.jftc.or.jp/kids)
	指導上の留意点	○ 日本の自動車が世界で売れていることに気付かせ、その理由を考えることを通して、学習問題を見出すことができるようにする。

図 27 情報活用の実践力の育成を目指した学習指導案

(イ) 視点② 児童によるICT活用場の工夫

児童によるタブレット端末の活用については、検証授業Ⅰで取り組んだが、活用用途が狭かった。検証授業Ⅱでは、タブレット端末の機能を最大限に生かせるような、児童によるICT活用の促進を考えた。そこで、児童用タブレット端末をより有効に活用するため、授業支援アプリ「ロイロノート・スクール」(株式会社LoiLo製、以下「ロイロノート・スクール」という。)を取り入れた授業を構成した。本アプリは、比較的操作がしやすく、操作説明に特別な時間を必要としないため、本単元で児童に活用させようと考えた。

授業支援アプリ(「ロイロノート・スクール」)は、以下のような機能を備えている。(図28)

主な機能	
カードを作る。	カード(スライド)とは、テキストカード、お絵かきカード、地図カード、写真・動画カードがある。個々のカードをタップすると、編集(文字入力・撮影等)ができる。また、全てのカードには手書きの文字や音声等を入れることができる。
カードをつなげる。	
カードを並び替える。	
カードを編集する。	
カードを全員に配布する。	

図 28 授業支援アプリの主な機能について

(ウ) 視点③ 自ら考え、発信できる力を育む学習指導の工夫

エキスパート活動では、検証授業Ⅰと同様に、学習問題の答えを出すために必要な情報の収集に取り組ませた。(第4～7時)

エキスパート活動で使用する資料も、限られた時間内で調べられるように要点を簡潔にまとめたり、イラスト、写真等を入れて、視覚的に捉えられるようにした(図29)。

検証授業Ⅱでは、「ロイロノート・スクール」の「教員からクラスの児童全員に資料を送信する」機能を用い、サーバーを通じて児童用タブレット端末にPDF



図29 エキスパート活動資料

資料を容易に配布することができた。そして、タブレット端末を囲んで、資料を読み合うなどの情報収集を行う児童の姿が見られた。

オ 指導の展開

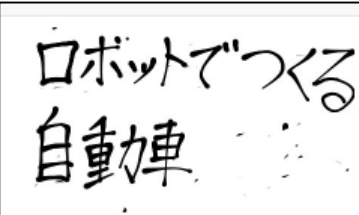
検証授業Ⅱでは、情報活用の実践力の育成における「必要な情報の主体的な収集・判断・表現・創造」、「受け手の状況などを踏まえた発信・伝達」を単元指導計画に位置付け、可能な限り児童がICTを活用する場面を設定した。ここでは、第5、7、8・9時の授業の実際を取り上げて、「学習活動」、「児童によるICT活用場面」、「指導上の留意点」について述べる。

- 【第5時】 情報の主体的な収集（思考）
 【第7時】 情報の主体的な表現，創造（表現）
 【第8時・第9時】 受け手の状況などを踏まえた発信・伝達（発表）

【第5時】 情報の主体的な収集（思考），受け手の状況などを踏まえた発信（発表）

主な学習活動	児童によるICT活用場面	指導上の留意点
1 本時のめあてを確認する。 2 学習の進め方を知る。 学習問題 関連工場には、自動車の部品を注文どおりに速くつくるために、どんなひみつがあるのだろうか。 3 関連工場で働く人たちの工夫や努力について調べる。【ジグソー学習】 エキスパート活動 - 五つのグループに分かれて、調べ学習を行う。 A：関連工場で働く人たちの思い B：シート工場での工夫 C：ジャスト・イン・タイム D：働く人の環境 E：シート工場に必要な部品 ホームグループ活動 - 各エキスパートが報告した知識を、ワークシートに書き込む。 クロストーク活動 - ホーム活動で得た五つの知識を再構成し、各個人で学習問題の答えを出す。 - 出した答えは、ネットワーク上の質問箱に送信し、全員で共有する。	学習の進め方 1 ジグソー学習 (1) エキスパート活動(8分) ① 紙資料を読み合う。 ② 分かったことの確認・話し合い ③ ワークシートへの記入 (2) ホーム活動 ① エキスパート報告(1分×5人) ② 自分の答えを出す。(3分) (3) クロストーク活動(発表)(15分) 図30 学習の進め方の提示資料  写真14 エキスパート活動の様子 図31 エキスパート活動の進め方の提示資料 図32 ホーム活動の進め方の提示資料 写真15 エキスパート活動資料 写真16 タブレット端末を用いて記録をしている様子 写真17 一覧表示（児童用タブレット端末） 写真18 拡大提示（電子黒板）	1 本時のめあてを確認する。 2 学習の進め方を知る。 ★ 児童用タブレット端末にアップロードしたPDF資料（自作）を基に、調べ学習を行わせる。 (1) エキスパート活動 ※ エキスパートチームみんなで活動をする。 ① 紙資料を読む。(3分) ・ 4人みんなで、音読！！ ② 確認・話し合い。(3分) ・ 書いてあることの確認。 ・ 「資料から、分かることは何か？」をしっかり話し合う。 ③ ワークシートへの記入。(2分) ・ 分かったことを、中心に一文で書く。 「〇〇は、………」ということである。」 (2) ホーム活動 ① エキスパート報告(1分×5人) 〈報告の仕方〉:例 ・ わたしは、〇〇〇について調べました。 ・ 読んだ資料には、〇〇〇や□□□という情報がのっていました。 ・ その情報から、わたしは□□□ということが分かりました。 ・ 何か、質問はありませんか。 ★ 児童が提出した回答のピックアップを行い、教員及びすべての児童用タブレット端末に、その児童の回答が表示されるようにする。 【ねらい】 ネットワーク上の質問箱に回答させ、全員の答えを共有するために、それぞれのワークシートを撮影させた。

【第7時】 情報の主体的な判断、選択、創造（表現）

主な学習活動	児童によるICT活用場面	指導上の留意点
自動車づくりのよさについてアピールするコマースシャルをつくる。 【コマースシャルづくりの約束】 ①4枚のカードでつくる。 ②キャッチコピーを付ける。 ③コマースシャルの原稿を書く。 (1) キャッチコピーを考える。	 写真19 児童が作成したキャッチコピーのカード	○ 学習の進め方等を示し、児童に見通しをもたせた。 コマースシャルづくり  ● ペアと一緒に一作品を作る。 条件：4枚のカードで構成。 そのうちの1枚は、キャッチコピーのカード。 1 キャッチコピーを考える。 2 絵コンテを考える。（ワークシート裏） 3 タブレット端末を使って作成。 4 ナレーション原稿を作成。 5 練習する。
 写真20 キャッチコピー入力（左：手書き→変換入力、中：キーボード入力、右：手書き入力）		図33 学習の進め方の提示資料
(2) 絵コンテを考える。  写真21 絵コンテ・ナレーション	 写真22 絵コンテ作成の様子	○ 既習事項を生かし、自動車づくりの特によいと思った点を一言で表現させた。 ★ 表示したいキャッチコピーの入力方法は、キーボード入力、手書き入力のいずれかを、各ペアに選択させた。 ★ 今までの学習で得た撮影のコツを生かすように工夫させた。
(3) カードをつくる。  写真23 見せたい箇所を大きく撮影している様子	 写真24 児童が撮影・加工したカード	〈撮影のコツ〉 撮影したい箇所を中心に大きく撮影する。（見開き2ページ分をそのまま撮影しない。） 見せたい箇所以外が映り込んだら、丸や線で囲むなどして強調していた。
(4) カードの順番を考える。 4枚のカードを提示順につなぐ。  写真25 カードの編集	 写真26 完成したコマースシャル	★ カードの提示順を考えながら、より効果的なコマースシャルカードができるように考えて、取り組ませた。
(5) 発表の練習をする。  写真27 発表練習の様子	★ コマースシャル発表会では、ペアが「発表係」と「タブレット端末係」を分担し、発表に合わせた、「伝わる」プレゼンを心掛け、練習に取り組ませた。	完成したコマースシャル（4枚）は、 ・カードの内容 ・キャッチコピー ・カードの提示順（構成） ・使用する写真等 の工夫が、各ペアによってなされていた。

【第8時・第9時】 受け手の状況等に合わせた発信・伝達（発表）

主な学習活動	児童による ICT 活用場面	指導上の留意点
日本の自動車づくりのよさをコマーシャルで表現し、発表する。	★ 発信者の話す内容とタイミングに合わせて、タブレット端末上の画面を動かし、スライドを再生させた。	
		
★ 受け手の反応、スライドの流れを見ながら、声量と話す速さに留意した発表を行なった。	★ 発表ペアに対して、反応や意見を返すようにさせた。	
①【発信者】（以下【発】）これは、わたしたちのキャッチコピーです。まちがいが起こらないように、工場で工夫しています。 ②【発】これは、「アンドン」と「ひもスイッチ」です。問題が起こったときに使うものです。もし、問題が起こったら、すぐに解決することができます。 ③【発】これは、指示ビラを見ながら作っています。「指示ビラ」を見ながら作っているの、正確で、まちがいがないように作れます。 ④【発】「指示ビラ」や「アンドン」などのスイッチを使うことによって、「正確に、安全に」作ることができます。		
【教師】⑤ 質問したいことや、分かったことはありませんか。 【受け手】（以下【受】）⑥ どんなときに、どんなことをしているのかが、よく分かりました。 【発】⑦ ありがとうございます。 【受け手】⑧ アンドンって、何ですか。 【発】⑨ ひもを引いたら、上の方に場所の数字が出てくるものです。 【受】⑩ 分かりました。 【教師】⑪ はい、ありがとうございました。		正確で安全な自動車づくり  正確に安全につくることができます。
		○ 発信者と受け手双方の意見や反応のやりとりがなされるように教員がサポートした。

(5) 【検証授業Ⅱ】分析・考察

検証授業Ⅱは、検証授業Ⅰに取り組んだ結果見えてきた課題を受け、その改善を図ることをねらいとして実施した。

ア 成果と課題（○：成果，▲：課題）※【 】は、検証授業Ⅰにおける課題（p.17）との関連。□は、児童の感想。

(7) 視点① 情報活用の実践力の育成を目指す学習過程

- 単元の指導計画に、情報活用の実践力を育成する三つの場面（「思考」・「表現」・「発表」の場面）を指導過程に合わせて位置付けたことで、毎時間、本時のねらいを達成するための児童によるICT活用を明確に設定し、展開することができた。【課題2】
- 「ICT活用の『5W1H』」を意識した授業を構想した結果、1単位時間における教員及び児童によるICT活用の意図が焦点化され、学習活動の効率化が図られた。【課題2】
- 本時の学習の流れ等を電子黒板・黒板に「学習の進め方」等として提示・掲示することで、児童は、ICT活用のねらいとゴールを確認することができた。これにより、教員がイメージするICT活用を児童と共有することができた。【課題2】

とても見やすくて、その日にやる活動が分かりやすかった。

(イ) 視点② 児童によるICT活用の方面の工夫

- タブレット端末の機能を最大限に生かし、児童が活用しやすい授業支援アプリを用いて、児童の学習意欲の向上と、単元の終末までの学習意欲の持続を図ることができた。

【課題3】

- 学習活動の展開に応じて、タブレット端末の台数もペアで1台、グループ(4～5人)で1台と活用形態の工夫を考え、タブレット端末の台数を確保し、準備したことで、児童はタブレット端末の有効活用を行うことができた。【課題3】
- 日本の自動車づくりのよさを発表するコマーシャルづくりの学習では、自分たちが伝えたいキャッチコピーと適合し、また受け手が視覚的に捉えられる写真の記録(撮影)や表現の仕方の指導を行った。第8時・第9時のコマーシャル発表会では、どのペアも指導した内容を生かし、工夫して、伝えたいことを表現することができていた。【課題2】

(ウ) 視点③ 自ら考え、発信できる力を育む学習指導の工夫

- エキスパート活動では、資料(教員自作)をエキスパートグループのタブレット端末で閲覧できるようにした。タブレット端末を活用した情報収集は操作を伴うことから、児童が進んで、資料の見たい箇所をタップしたり、拡大したりして情報収集に取り組む姿が見られた。【課題3】

教科書などよりも見やすく、大きくしたり小さくしたりできて、とても良かったです。

- 学習問題の答えを発信する学習活動では、児童が進んでタブレット端末の操作を行い、自分の答えを教員に提出(送信)する準備を進めたり、電子黒板に一覧表示された友達への答えに興味をもったりするなどの姿が見られた。ICTを活用することにより、問題解決に対する児童の主体性の向上を図ることができた。【課題3】

自動車ってどうやってつくるんだろう？となやんでいたけど、これでかい決まりました。むずかしい言葉もあったけど一人で覚えるのではなく、友達とクイズみたいにしたら、かんたんに覚えられました。休んでいたときの分も、友達に教えてもらい、覚えることができました。覚えていないところは、教室の右がわにはっているのでもた見て復習したいです。色々な工場があるその中の一つの工場に行ってたくさん質問したいです。自動車が好きになりました。どんな新しい車がしょうらいあるか楽しみです。

- 「日本の自動車づくりのよさをアピールするコマーシャルづくり」という学習問題とコマーシャルの核となる日本の自動車産業の特徴等の理解(単元のねらい)に効果が見込まれる学習活動を設定したことで、児童は既習事項を生かして、「日本の自動車づくりのよさ」を進んで考え、表現していた。【課題1】

コマーシャルは、みんなの発表を見て、復習できた。キーワードを見ると「ニーズ」、「ロボット」、「ようせつ」などたくさんの言葉がでてきたけれど、私はやっぱり車の安心・安全が第一だと思いました。タブレットとテレビをつないで、コマーシャルができるって初めて知りました。

これからも、コマーシャル、分たんなどの授業がしたいです。

- ▲ 発信者と受け手の立場にいる児童が、互いに発信・受信の立場を体験できるような双方向型のコマーシャル発表会を意図していたが、発表に対する受け手の反応や質問、感想の引き出し方が難しかった。発信者と受け手双方への教員による助言も行ったが、どのような反応のやり取りをしたらよいか、事前に児童にイメージをもたせる必要があった。また、教育活動全体を通して、普段から双方向の発信・受信の立場で、双方向のやり取りを体験できるような話し合い活動等を行うことも大切である。【課題1】

相手に答えることはできたが思っていることをうまく返すことができなかった。

IV 研究のまとめ

1 検証授業前・検証授業後の実態調査から（対象 本校第5学年）

図34～図39は、検証授業ⅠとⅡに取り組んだ本校第5学年児童を対象にした検証授業前・後の実態調査結果をグラフにまとめたものである。

図34～図36は、児童によるICT活用時における授業の「楽しさ」、「分かりやすさ」、「やる気」についての問いの回答結果である。

三つの問いについては、検証授業前と検証授業後と比較すると、児童によるICT活用の意識の高まりが見られることが分かる。

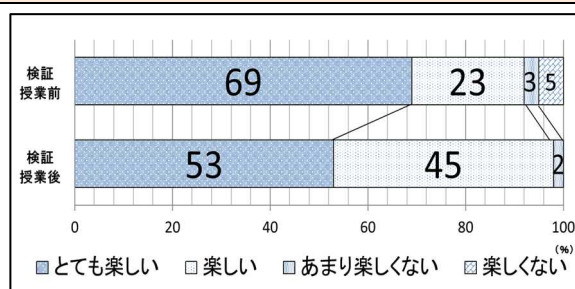


図34 授業の楽しさ

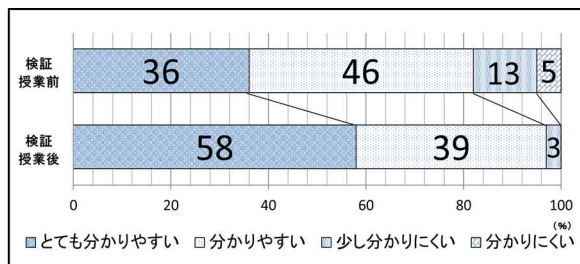


図35 授業の分かりやすさ

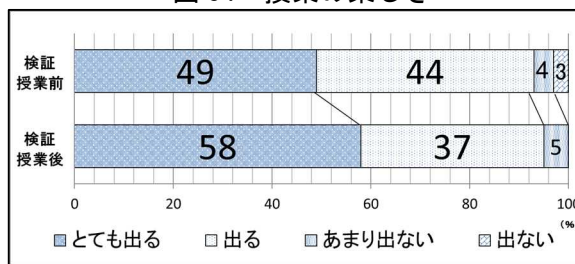


図36 授業に対するやる気

「ICTを使ってまとめる学習の好き・嫌い」についての問いでは、回答の全体的な傾向にはほとんど変化は見られなかった（図37）。

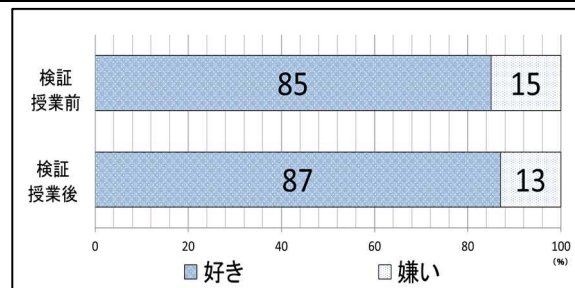


図37 ICTを使ってまとめる学習の好き・嫌い

「ICTを使って、プレゼンテーションにまとめる学習が好きな理由」を、検証授業前は、「楽しいこと」と回答していた児童が多かったが、検証授業後は、ICTを使うことのよさである「まとめやすさ」と回答した児童が、検証授業前に比べ31ポイント上昇し、46%になった（図38）。

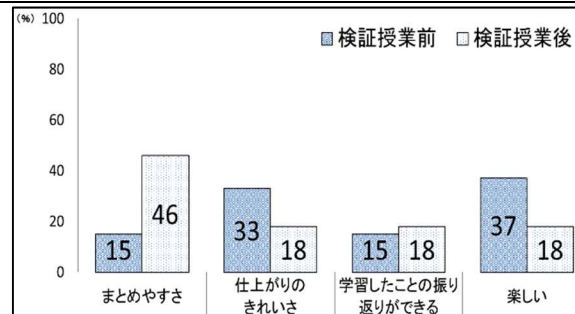


図38 ICTを使ってまとめる学習が好きな理由

図39は、「ICTを使って発表する学習の好き・嫌い」についての問いである。

「好き」と回答した児童が、検証授業前の61%から、検証後授業は90%と、29ポイント上昇した。

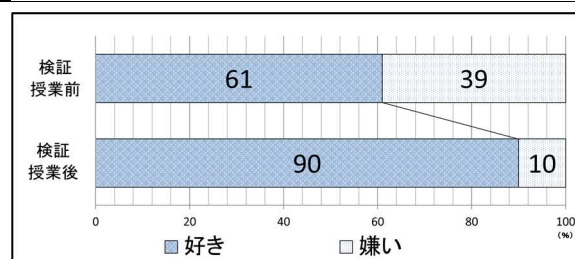


図39 ICTを使って発表する学習の好き・嫌い

2 成果と課題

(1) 成果

- ・ 情報活用の実践力の育成に関わる学習過程として、思考、表現、発表の場面を位置付けた指導計画を作成した。これらの場面に児童によるICT活用を取り入れた授業を構想することにより、情報活用の実践力の育成を目指した学習活動に、児童は比較的容易に取り組むことができた。
- ・ 単元及び1単位時間の指導計画に基づき、タブレット端末や学習用デジタルコンテンツを効果的に児童に活用させたことで、学習意欲の向上と持続が図られた。また、必要な情報を主体的に表現したり、創造したりする情報活用の実践力の育成に効果があることが確認できた。
- ・ 教材や学習の進め方、児童の考えを全体提示するなどの教員によるICT活用は、児童間の情報共有や意思疎通の充実を図ることに役立った。また、このことが発表の場面における発信・伝達による意思疎通や喜びの体感につながり、情報活用の実践力の育成に寄与できた。
- ・ 単元及び1単位時間を通して、児童によるICT活用と一人一人が役割を担い、問題解決に取り組めるような学習指導の工夫をすることで、児童が自ら「ICTを使ってまとめた、表現したい。」という意識が高まり、進んで実践する姿が見られるようになってきた。
- ・ 問題解決に必要な情報を収集する活動において、紙媒体の資料と、児童がICTの操作を伴いながら視聴できる動画や閲覧できるPDFデータ等のデジタルコンテンツとを併用し、一連の学習指導の在り方を工夫したことにより、児童に身に付けさせたい知識の定着にも効果が見られた。

(2) 課題

- ・ 今回作成した以外の単元の指導計画についても、情報活用能力の育成をねらいとしたものを順次作成し、学校全体で取り組めるようにする必要がある。
- ・ 各教科等の年間指導計画に、児童の発達段階に応じたICT活用を位置付け、基本的操作スキルの向上を図る必要がある。
- ・ 発信者がICTを活用して、説明や発表したことを、受け手が反応や意見を返すなどの双方向の発信・伝達を行う場面を多く設定し、繰り返し経験させることで、授業以外の生活場面でも双方向の発信・伝達ができるような力を育成するための工夫が必要である。

(3) おわりに

タブレットを使う事で分かりやすく、楽しくできました。一時間、一時間がとても速くすみ、もう終わりが、と思いそれと同時に、こんなに勉強して楽しかったか？と思います。

これは、検証授業Ⅱ後の児童の感想である。

「情報活用の実践力」の育成をねらいとして取り組んだ本研究において、児童から「こんなに勉強して楽しかったか？」という感想を得た。この児童にとって、検証授業の1時間1時間が充実した時間だったことが伺える。このような感想をもつ児童を一人でも増やせるように、今後も児童によるICT活用を授業に積極的かつ効果的に取り入れながら、子供たち自身が自ら成長を感じられるような授業を行っていきたいと思う。

〈引用文献・参考文献〉

- 文部科学省 『小学校学習指導要領解説総則編』 平成20年 文部科学省
- 文部科学省 『小学校学習指導要領解説社会編』 平成20年 文部科学省
- 文部科学省 『小学校学習指導要領解説家庭編』 平成20年 文部科学省
- 文部科学省 『教育の情報化に関する手引』 平成22年 文部科学省
- 文部科学省 『学びのイノベーション事業 実証研究報告書』 平成26年 文部科学省
- 文部科学省 『21世紀を生き抜く児童生徒の情報活用能力育成のために』 平成27年 文部科学省
- 鹿児島県総合教育センター 『研究紀要第118号』 平成26年
- 鹿児島県総合教育センター 『研究紀要第109号』 平成17年
- EEAJ 『教員のICT活用指導力向上／研修テキスト 増補改訂版』 平成21年 JAPET
- 赤堀侃司 『タブレットは紙に勝てるのか タブレット時代の教育』 平成26年 ジャムハウス
- D-project 編集委員会 『つなぐ・かかわる授業づくり タブレット端末を活かす実践52事例』
平成26年 学研教育出版
- 中川一史監修 『ICTで伝えるチカラ 50の授業・研修事例集 小学校全学年対応』
平成25年 フォーラム・A
- 東京書籍 『新編 新しい社会 5年（下）』 平成27年 東京書籍
- 東京書籍 『新編 新しい社会 6年（上）』 平成27年 東京書籍
- 光村図書 『社会 5』 平成27年 光村図書
- 光村図書 『社会 6』 平成27年 光村図書
- 教育出版 『小学社会 5（下）』 平成27年 教育出版
- 教育出版 『小学社会 6（上）』 平成27年 教育出版
- 日本文教出版 『小学社会 5（下）』 平成27年 日本文教出版
- 日本文教出版 『小学社会 6（上）』 平成27年 日本文教出版
- 株式会社LoiLo 『ロイロノート・スクールを極める』 <https://n.loilo@loilo.tv/ja>

長期研修者〔白尾 麻衣〕

担 当 所 員〔木原 敏行〕

【研究の概要】

本研究は、情報活用能力の中でも、児童の ICT 活用による情報活用の実践力の育成に関わる一連の学習指導について、実践研究したものである。

具体的には、情報活用の実践力における、特に「判断」、「表現」、「発信」などの力の育成をねらいとし、児童が ICT を活用しながら、自ら考えたり、発信したりするような学習指導の工夫や授業構想、単元指導計画を作成した。

これらを基に、タブレット端末や授業支援アプリを用いた児童による ICT 活用を組み込んだ授業を行い、検証を行った。

その結果、タブレット端末と授業支援アプリを用いた、児童による ICT 活用は、児童の学習意欲の向上と持続に効果的であった。また、単元及び 1 単位時間を通して、児童による ICT 活用を推進し、問題解決的な学習場面において、その指導法を工夫することで、児童の「ICT を使ってまとめたい、表現したい。」という意識が高まり、進んで ICT 活用を行う姿が見られるようになった。このことから、本研究の取組により、児童の情報活用の実践力の育成が図られた。

【担当所員の所見】

本研究は、社会の情報化が進展する中、未来を担う子供たちに求められている、生きる力に資する情報活用能力の育成、特に情報活用の実践力の育成を図るための学習指導の在り方について研究したものである。

本研究では、教科の目標を達成するための学習活動に、児童による ICT 活用場面を意図的、計画的に取り入れ、教科指導の充実を図るとともに、より効率的、効果的な情報活用の実践力の育成を目指している。そのために、1 単位時間や単元の指導計画に、「思考」、「表現」、「発表」の場面を位置付け、教員と児童が共に、ICT 活用のイメージや学習のゴールの見通しを明確に共有しながら行う学習指導や、問題解決的な学習にジグソー学習の学習過程を組み込んだ学習指導の工夫を行っている。これらの授業実践を通じた研究成果は、児童の主体的、協働的な学びの推進にも通じる部分があり、今後の学習指導の在り方に十分参考となる取組である。

また、今後、各学校にも導入が進むであろうタブレット端末と授業支援アプリの可能性を検証し、その特性を生かした活用の事例は、今後の ICT 活用の在り方を示す有効な資料となる。

今後も、継続した実践と更なる工夫改善により、児童の情報活用能力の育成に努めてほしい。